

熊本大学

重石光弘教授・尾上幸造准教授と愉快な仲間たち



重石 光弘 教授



尾上 幸造 准教授

今回は我々熊本大学の環境材料工学研究室および複合材料工学研究室について紹介させていただきます。筆を執るのは昨年から複合材料工学研究室に所属している修士2年の一学生である。歴としては浅い人間ではあるが、お世話になって2つの研究室（あわせて「材料研」と呼んでいる）の魅力はこの記事の中で最大限紹介していきたいと思う。

まず、それぞれの長を紹介する。環境材料工学研究室を束ねるのは学料の大黒柱・重石光弘教授、そして複合材料工学研究室を束ねるのは4年目を迎えて熊本の水にすっかり慣れできた尾上幸造准教授である。この2人の下、修士2年の学生5名、修士1年の学生4名に加え、新学期には博士後期課程の社会人1名と学部4年の8名が新たに研究室の仲間となった。秋には仮配属という形で学

部3年のメンバーが加わることになるが、本配属の候補として興味を持つてもらえるよう、研究内容だけに限らない我が研究室の魅力を存分にアピールしていきたいと思う。研究室には、中国から1名、アフガニスタンから3名が博士後期課程として、インドネシアから1名がポスドクとして所属しているなど、国際色も豊かだ。海外に投稿した研究論文をきっかけに海外からここ熊本への留学希望も少なくないと聞く。私もここに所属する一研究員として海外発表を行うべく日々奮闘中である。

筆者は学部生の頃は構造力学研究室に所属していたが、研究を進めていく上で材料に興味を持ち、進学を契機に材料研の一員として加わった身である。そんな私が研究室を移ったことで大きく変わったと感じることのひとつに「実験する機会が多い」とい

うことがある。入った当初は右も左も分からなかったが、安心したのは規模の大小にかかわらず、実験の際には協力して作業を行うチームワークと温かさがこの研究室にあったことだ。この面倒見の良さ、仲間意識は月例ゼミやゼミ旅行、定期的に開かれる飲み会の場などでも強く感じる。皆個性があつて楽しい人たちがばかりだ。

もちろん時には実験で悩むときもある。そんな際に指導をしてくださるのが技術専門職員の友田さん、戸田さん、技術職員の濱崎さんで、皆さん実験のプロフェッショナルである。私たち材料研のメンバーは皆このお三方に足を向けて寝られないほど大変お世話になっている。実験の時は真剣に、それでも時折繰り出される冗談や意外な隠れプロフィール等、人間的な魅力は尽きることはない。今後もお世話になる機会が多い、本研究室にとって

欠かせない素敵な方々である。両先生に就く我々学生は、理解のあるお2人の下で自発的な活動を取ることのできる、大変恵まれた環境にあると言える。それは決して放任というわけではなく、研究の主役は私たちであるという考えにもとづいている。重石教授は「自分を大切に自分を伸ばそう 他人を大切に世のため尽くそう」をスローガンとし、「今何をすべきか」ということを考えた積極的な行動を起こすことを大事にされている。尾上准教授は「学問上の上下関係は存在しない」という考えから私たちにもフラットに接してくださる。問題に対しては一緒に悩んでくれるし、解決した時は自分のことのように喜んでくれる。時には意見を求められることもあるが、それは期待の表れともいえる。一人前の研究者として認めてくれてい

熊本大学 環境材料工学研究室・複合材料工学研究室

文責者

熊本大学 複合材料工学研究室
修士2年 田原 正隆



世界初パルスパワー技術による再生骨材製造プラント Pulsar-Mk. I



RCはり供試体の曲げ載荷実験



実橋梁でのコンクリート物性値の測定



ワシントンD.C.で開催された学会発表の様子



コンクリート工学年次大会2018(神戸)「キング・オブ・コンクリート2018」

る、と感じる瞬間である。目下のところ、環境材料工学研究室では本学の目玉でもあるパルスパワー技術の建設分野への適用、海砂代替骨材の開発、アコースティック・エミッションを用いたコンクリート材料の評価分析などの研究を、複合材料工学研究室では高炉スラグ細骨材を用いた高耐久コンクリート、フライアッシュベースジオポリマーの製造条件の最適化、PCA継手などの研究を行っている。自分の取り組みでいる研究が新たな発見に繋がるというフロンティア精神をエネルギーに、各自が黙々と励む時間も

我々の研究室のもうひとつの強みであると思う。昨年私は神戸で開催された「キング・オブ・コンクリート2018」に熊本大学チームの代表として参加させてもらった。ほとんど知識がない中、辛抱強く予備実験や知識の定着に付き合ってくれた先生、先輩方、後輩には本当に感謝してもしきれない。チームとしての「動」の団結力と各自の地道な「静」の努力のおかげで一次予選を見事1位通過、二次予選でも勝ち進むことができた。本選でトランプルに見舞われながらもそれなりの成果を残せたことは適応力の高さを

見せることができた、今となってはいい思い出である。熊本地震の影響で約2年間プレハブ仮設校舎での研究活動を余儀なくされたが、つい最近、晴れて新校舎が完成し、これまで別々であった材料研はひとつの部屋を共有することになった。これまで以上にメンバー相互のやり取りが増えることが私は楽しみにできない。より一丸となった材料研の「動」のエネルギーと、同じ空間を共有することで濃密になる「静」のエネルギー、その両方でお互いを高め合える良好な関係をこれからも築いていきたいと思う次第である。



新しくなった工学部1号館